

第一章 肉体と境遇を良くする道

谷口——大變結構なお話を承^{うけたまわ}らしていただきまして

ありがとうございました。そういうふう^{がい}に外界に映し出された「自分の心の影」というものに照して、自分というものを省^{かえり}み「二セ物の自分」を捨てて「本物の自分」の生き方をするのが「生長の家」の生き方なのであります。しかし、この虫に螫^さされるとか病気になるとかいうのはわれわれを反省せしめるために神が与えた神罰であるかと言いますと、「類が類を招^よぶ」心の法則で、そうなるのであって、神が人間を罰するのではないのであります。念というものは象徴的に展開して、その念に類似する形を現象界に具象化するのでありますから、悪念は神から直接に罰しも罰されもしないわけですから、その悪念を出した人の肉体と環境とにその悪念の内容^{なかみ}相応^{なかにあう}のものが形に化^かして實際現象としてあらわれて来るのであります。「生長の家」で「神罰は無い」と断言しますと、自分の病氣さえ治れば、あとはいい気になって利己的な忘^ぼ恩^{おん}的な行ないを平気でやる人ができてくるかもしれませんが、そういう人の周囲には同類の忘恩的な利己的な人たちが集まって来るのであります。忘恩的な人のところへは忘恩

的な人間ばかりではなく「忘恩的な事件」までも集まって来るのであります。「忘恩的な事件」と言ったらどんな事件であるかと申しますと、善い結果を得るだろうと思つて一所懸命にその事件に誠を尽くして、自己の努力に対しては忘恩の結果すなわち自己を裏切るような結果を招くようなことになるのであります。よくこんな人は申します——「必ず成るといふ自信をもって、誠を尽くせばどんなことでも成就するといふことが『生長の家』に説いてあるが、今度の事件には自分は自信をもって誠を尽くしたのに不成功に終わった」と言われるのであります。自信と一事實行の誠とは、おのおの事を成す要素ではありますが、ただそれだけでは必ずしも事は成就しないのであります。自信に対して自信を裏切らず、努力に対して努力を裏切らない結果を得るには、自分自身が裏切つた心持と行為とをしないすなわち忘恩的な心持と行為とをしないことが必要なのであります。忘恩的な心持はどこから生まれて来るかと申しますと、たいてい物質欲に促^{うなが}されるからであります。「恩は知っている」と自分でも思い、感謝もしているつもりであっても、「物を出すのは惜しい。心で感謝しておこう」などと思つていきますと、その「惜しい」といふ心が、恩者に遠ざかる働きとなつてあらわれ、しだいにその人間を忘恩的にし、ひとりで偉くなつたように慢心が出てきて、恩者を忘れてしまうようになつてくる場合があります。そうなつ

てきますと、自分は真理を十分悟ったつもりであり、神想観も一所懸命にやっているし、自信と熱誠^{ねっせい}とをもって事業をやっているのにどうもことごとくに自分を裏切る結果を招くようになります。これは、「類は類を招ぶ心の法則」によりまして「裏切る心」が、「裏切られる結果」を招くことになるのであります。こういうように「心の法則」というものは、嚴重に働くものでありまして、「物質無、我れ神の子なり」の絶対境に達しない限り、「刺す心」は「刺される結果」を招く、「裏切る心」は「裏切られる結果」を招くのであります。また、真に悟りの絶対境に達しますれば刺す心も裏切る心も無くなるのであります。現象世界は本来無いのであって、念の象徴化でありますからその象徴を追うてさかのぼってゆけば、その病源なる病念に到達するのです。神のお罰^{とがめ}であるなら、もっとハッキリした形をとるが、象徴^{しるし}であるがゆえに明瞭にそれと気づかぬことが多いのであります。先般東京の誌友で時々鼻血が出るので「ひとの道」の教祖に神宣^{じんせん}を乞うた人がありました。いろいろな物事思いつめる性分があるからそれを直せ」という神宣でありました。この人はこの神宣をありがたがり、そのとおり実行しようと決心しましたが、それ以来鼻血が出なくなりました。その人はまたある日膝坊主^{ひざぼうず}に擦り傷を受け、また一匹の蜂が舞い下がってその人の腕を螫したのであります。でその人は試みに「ひとの道教団」に再び神宣を乞いましたら「自分ばかり偉いと思って人をいろいろ批評す

る性分があるから神がこれにお気づけしたのである」というお示しでありました。その人、これは大変自分の性分に合っている御神宣を受けたと思って、「人の道教団」を崇敬してただちにその信徒になったということとであります。鼻血が出るのは、物を鼻にかけ、また高ぶり、上に血が昇り、自分考えを標準にして物事クヨクヨ思いつめる念が象徴化したのであります。蜂に螫されるのは、自分にある人を刺す心——いろいろな人を批評し傷つける心が象徴化したのであります。膝坊主は曲げて突き出す所であります。この人は曲げて突き出して他と衝突摩擦して血を出したのであります。いろいろと人を批評し、自分の方が曲ついてもそれを悟らず、自分を偉いように思い、他と衝突する性分がこの人にはあるゆえに、その念の象徴化としてこの人はそういう傷を受けたのであります。病は神のお示しということも、天理教のように「理^りは神じゃ」という「理」——すなわち「生長の家」で言う「心の法則」を知るならば、ひとの道教祖ならずとも何人にもこういう判断は自分につくのであります。わからない場合には神想観をして、精神を統一し、神にお願いして自分を空しゅうしておれば、心に必ず神宣が浮かんでくるのであります。神示を受ける方法は『生命の實相』全集の觀行篇にわたしの書いた「神示を受ける道」を御参考になさるといい。「ひとの道教」では「念の具象化の法則」を教えないで教祖に頼って自分の心得違いを教えてもらう、「生長の家」では各誌友が心の法則を

知るから、誌友おのおのみんな「ひとの道教祖」と同じになってしまつて、自分の環境を見、自分の病氣を見て、自分の心のまちがいを悟ることができる。悟れるだけではなく直そうという誠さえあれば聖典を繰り返し読み神想觀を励めば自然に直つてくるのであります。

谷口——自分の心の欠点を知りたい、知つてそれを直したい。しかし、欠点を知つても治らないのは「欠点」と「自分」とが対立的になつて、「欠点」と「自分」というものが、相撲をとるように四つになつて取り組んでいるからなのです。そうなると「欠点」と「自分」とは対等な力になるから、ともすれば自分の方が負けそうになるのです。「欠点」に勝つには「欠点」を神想觀をして神に預けるのがよいのです。そうすると光の中へ暗を預けたようなもので暗は自然に消えてしまうのです。沢田さんが神想觀の修行をせられると自然に心が穏やかになり、酒や煙草の味が変わつて不要になつたと同じように、心の欠点が自然に変わってくるのが本当の宗教の功德くどくなのです。努力して直す間は道德行で対立的になつてゐるのです。実相のうちに溶け入れば、もう欠点も悪い性格もないのです。だいたい、自分の欠点を他から教えられなければわからないというのは実に弱い考えであります。それから、「生長の家」で言う「病氣は本来無い」ということと、「病氣は神のお示し」ということとの間にはなんらの矛盾もないのであります。しかし「病氣は神のお気づけ」というの

はどうでありましょうか。「お気づけ」という言葉の奥には「あいつはこんな悪いことを考えまたは行なつてゐるから病氣にしてやろう」というような病氣作成の神の意志が働いてゐるよう受け取れるのです。しかし、神はそういう病氣作成の意志はないのであります。心を変えたと病氣が治る事實は、「病氣は象徴しるしとして存在するのであつて、実在として存在するのではない」という根本原理によつてそうなるのであります。病氣は象徴しるしであるからこそ、象徴の原因たる「念」を変えれば、象徴たる病氣が消えるのです。それは象徴であるから一つの「示し」である。その「示し」の奥には「念の具象化の法則」がある、天理教のいわゆる「理」がある。この「理が神じゃ」ということになるので、象徴は神示とも言えるのです。しかし各人にはすべてこの「理」すなわち神性が宿つてゐる、その神性に照らし、「理」に照らして自分の欠点がわからないというはずはないのであります。自分の欠点は、「ひとの道教祖」よりも自分自身が一番よく知つてゐるのであります。だからひとの道教祖などから神宣いひかという厳めしいものを貰つて「これは誰にも見せてはならぬ、見せては効果が失せる、人に見せずに自分だけが黙々として実行すればなんじの病氣とか不幸とかは治る」と言われてから、その神宣というものを見ると感心する。「なるほど自分の心の欠点によく合つてゐる」と感心するのであります。その人が「なるほど、自分の欠点によく合つてゐる」とわかるのは、自分が前から自分の欠点

を知っていたからであります。自分の欠点というものを自分がぜんぜん知らなければ「ひとの道教祖」の御神宣が自分の欠点に的中しているかどうかもわからないはずです。学校の先生でも、自分の知らぬ学科の答案を学生から出されても、その答案が合ってるかまちがっているかわからない、学生の答案が正しいとわかるのは先生の方がその学科をよく知っているからであります。それと同じく「ひとの道教祖」の神宣が正しい、よく自分の欠点に合っていると感心するのは、まずその人自身の方が自分の欠点をよく知っているからです。自身の欠点については自分自身の方が先生であって、神宣は答案であります。「生長の家」では自分自身を尊べと言うのでありますが、たいていの人は自分自身を尊ばないから失敗する。たとえば自分の欠点は自分で知っていながら、そういう欠点を知っている「尊い自分」すなわち神性が自分自身に宿っているということには少しも尊敬しないで、たまたま「ひとの道教祖」というような他の人が自分の欠点を知っていたら、その人を尊敬するのであります。だから本末を顛倒しているのです。八卦見とか予言者とかいうものが来て、「あなたの過去はこうであります」と言われると「よく当たった」と感心するが、「自分は自分の過去を知っている」ということには少しも感心しない——人間は妙なものでありますなア。それで自分の欠点は自分の神性で知っていながら、その「自分の神性」というものを軽蔑しているから、たいていの人は自分で

気づいた欠点を直そうとしないのであります。自分の内に神がある、自分が神性である、自分が教祖である。これが分からないから、神がほかにあるように思い、神性がほかにあるように思い、教祖がほかにあるように思い、自分のすでに知っていることを、他の教祖から知らされて感心するのであります。では、この「ひとの道教祖」のような教えは必要かと申しますと決してそうではない。やはりこういう教えも要るのであります。「生長の家」は究竟^{くぎやう}真実大乘の教えである、釈迦の教えにすれば『法華經』以後の教えであって、「すべての人間が神の子であり、すべての人間が教祖である」教えでありますが、その教えの神髓に達する以前の人——自分を神の子だと尊敬できない人——には、依頼心を出して他に頼る、他に頼ることによって、他から導かれて自分の心の欠点を直すようにするのもよいのであります。それはちょうど小学、中学などの学習は教師の指導による分量が多いのですが、大学以上になると自己自身の発見、啓発が、その主なる学課になるようなものであります。だから、わたしは「ひとの道」を悪い教えだと言わない、小学校は悪い学校だと言えないようなものであります。それは善い教えであるが、いつまでも、そんなに他の人から出て来る神宣というようなものばかりに頼っているのは、いつまでも小学生でいるのと同じだ。早く小学校は卒業して、中学、大学へと進級して自己自身の発見啓発それ自身を御神宣とし、その神宣を尊んで実行するようになら

なければ、本当に救われたと言えないというのであります。「ひとの道教団」から出てくる「神宣」というものは、原則上「他の人に見せてはならぬ」ということになっているのでありますが、これは微妙な信者心理を掴^{つか}んでいるのであります。それは他の人に厳秘^{げんぴ}にするということによって、一般に見せたら、なんじやこんなものかというようにものに「神秘感」と厳かさ^{げん}を添える。あの人は「神宣」で病が治ったと言うが、どんな神宣だろうということによって、他の人に入教を誘惑する。神宣の内容が他の人には不明であるから、黙々とその人が実行するに当たって、他の人から冷やかしやら、邪魔が這^{はい}入って来ない——そこに神宣というものの魅力やら効果やらがあるのであります。で、その神宣の内容とはどんなものであるかと言いますと、「生長の家」へも数名の「ひとの道教徒」がお見えになりまして打ち明けて話されたところによりますと、こちらから、病気の容体とか家庭の災厄の状況などをくわしく書いて、支部から本部へ通じますと、それに対して神宣と称して本部から来るのですが、ある胃病患者には「お前は我が強いから我をなくせよ。不平をもたぬようにせよ。食物をよく嚙^かんで食べ」というようなことが書いてあったそうです。この人は、その神宣が馬鹿らしくて常識でわかることを何を神宣だと言っている、と思って実行せられなかったそうですであります。またある子供の病気には「夫婦仲よくせよ、妻は良人に絶対服従せよ」というようなことが書いてあっ

たそうです。またある事業に失敗した人には「今を大切にせよ。なんじは尻が重い。自分はじつとしていて、どうにかなるなどと考えているがもっと尻軽に働かねばならぬ」などと書いてあったそうです。まことにこれらは善い神宣でありますが、「生長の家」へ来て聖典『生命の實相』を読み、生長の家の生き方に照らしてみますと、すべて自分自身でわかることでありまして、何も他に頼る必要はないのであります。ただ、自分でわかったことは神示と思わず、輕蔑して実行せず、某某教祖から示された神宣だということありがたがって実行するのであります。これが愚かな人間の弱点でありますから、「生長の家」でも対機説法で神宣を送って病気を治した例もあります。だがこれは無制限にはしない。仮に某教団に十万の信徒があつてその一割が、教祖に神宣を乞うとしますと一万でありますが一万通の質問状を読むだけでも一人の教祖ともう数人の教祖補佐だけぐらいでは足りない。今はそれほど多勢の信徒も質問状もないかもしれませぬが、やがて信徒が殖えて、そういう多くの数になったとしますと、決して教祖がいちいち神宣を下している暇がない。で、そういう場合どうするかというと、「おみくじ」のように、胃病にはこれ、肺病にはこれと念の象徴化の法則に合うことを予め書いておいてそれを係りの人が神宣と称して信徒に下げることにするのです。で、たいはいそういう場合の神宣の内容は一般に誰にでも通用すること、それで治るのであります。「お前は我が強い」

と言われても「我」の強くない人間はほとんどないから、「よく当たる！」と感心する。どんな仲の善い夫婦でも、時には夫婦喧嘩をする、そういう場合に子供が病気になる、夫婦和合して子供が治るのは「生長の家」の説くところです。「生長の家」では、今を生かせ！

成功の道だ、と切実に常に書いてある、皆神宣です。

先日東京から来られた松本さんが「今」という一字を大きく揮毫してくれとお頼みになって、書いて差し上げた。これも神宣であります。「生長の家」では聖典『生命の實相』や毎月の『生長の家』がことごとく神宣ですからそれをお読みになり、それに照らして自分の言行を反省してごらんになれば、自分の欠点や心得違いというものは自分でわかり、自分自身が教祖となり、自分の欠点に対して自分が神宣を下しうるようになっているのであります。しかし、ともかく、近ごろ「ひとの道教団」というような新しい宗教団体が頭角をあげて「病氣も環境もわが心の影」という生長の家の所説の真理を、神宣という厳かな名によって信者に単純な方法で実証させているのは大変結構な神の摂理だと思えます。ただ、そういう教えに頼る信者の常として、一にも神宣、二にも神宣、三にも神宣と、他からの神宣ばかりを頼ることになり、やれ蜂が螫したから神宣を貰おう、蚊が螫したから神宣を貰おう、臍に傷ができたから神宣を貰おう、腹が痛いから神宣を貰おうというように、年から年中、なんでも彼でも神宣に頼って自主独立の生き方を失うようになる危険があり

ますので、そういう教団に入り、環境も病氣もわが心の影だということがわかったら、もういつまでも一人立ちのできぬ子供のように御神宣ばかりに頼ってはいならぬ。本当の救いにあずかるということはいつまでも一人立ちのできぬ人間になることではありませぬ。さらに一步を進めて、「生長の家」的に自主独立の精神に立ちかえり、ひとり立ちして、自分自身が神であり教祖であり、他からの御神宣よりも自分の御神宣が自分を一番よく知っているというようになっていただきたいのであります。だからひとの道教団の教えが生長してくれば当然「生長の家」になってこなければならぬのであります。

第五章 種々の宗教問題に答う

一、久遠実相の世界について

上沢——何に遇っても恐れない無畏怖の境地に入りたいと思うのですが、それについての心得というようなものを承らしていただきとうございます。

谷口——神が創造せられた久遠実相くおんじつそうの世界、この世界の実相のみを観るようにして、移り変わる現象世界を實在と見ないで、仮の相、非實在と観ずるのです。そうすると心が現象世界の変転に捉えられなくなります。久遠実相の世界のみが實在の世界ですから、そのほかのものの変化に心を動ずることは要らないのです。

上沢——久遠実相の世界とは、いかなる世界のことでありますか、これを外の言葉で言え　ば、神界靈界というほどの意味でございいますか。

谷口——久遠実相の世界というのは、神界靈界というよ
うな意味ではありません。たんに「実相の世界」と
言つてよろしいのであります。「久遠」というのは、生
滅常なき現象世界に対して、永遠不壊の実相世界を形
容したのであります。「実相世界」を靈界のことだと思
う人がありますが、靈界というのは現象界の一部で靈
魂の住む世界でありまして、そこには迷える苦悶せる
亡者の靈魂もおりますが、「実相世界」とは神の創造
給うたままの完全さが今も永遠に続いている世界であ
りまして、現象世界の奥にと言おうか、内面　にと言
おうか、背後にと言おうか、今も実在しているものであ
りまして、この実相の世界においてはあらゆるものす
べて至妙に、あらゆるものすべて至美に、あらゆるもの
のすべて完全に、いっさいのものすべて神の創造せる
ままに、神の無限知と無限愛と無限生命と無限能力と
を体现しているのであります。

上沢——このお言葉の由つて生まるる根拠ともいうべき
ものを拝承いたしたいと思ひます。どうもそう言わ
れまして、われわれはその「実相」の世界を目に見
ることができません。

谷口——「実相世界」は五官に触れたり、六感に観え
たりする世界ではありませんから、立論の根拠を、目
に見えるものを持つてきて、これはこうであるから、実

相世界に存在するものは美しいとか完全であるとか申
すことはできないのです。ただわれわれが「実相世界」
という完全な世界の存在を知るのは、実相覚という一
種の靈覚によるのでありまして、この悟りが天徠の光
線のように降つて来るので、「実相」の存在ということ
がパツと明るくなるのでわかるのです。たとえばみ
ますと、現象界は暗の世界ですから、暗を手捜りで探
つてみても実相の有様はわからないのです。大体その
手触りから見当をつける人もあります。たとえば現象
界のいろいろの法則の整然たることや天体の運行の誤
りなきことや、植物の種子に宿っている生命の発芽と
いうことや——いろいろ現象界の事柄から総合結論し
て実相世界の存在ということを帰納する賢者はありま
すが、現象界の事実から見ての結論はまだ実相覚とい
うことはできないのです。実相の扉をひらいて実相を
知る最も簡単な鍵は神想観をなして、存在の実相と
自己生命の実相とを正観することであります。

上沢——「実相の扉をひらいて実相を知るには」ただ神
想観をすればよろしいでしょうか。

谷口——「実相」を知るには前に申しましたように、現
象界を暗中摸索して、それから結論を下しているだ
けでは、頭腦の知恵で知っただけで、実相を悟つたと
は言えないのです。実相を覚るにはどうしても神想
観をして存在の実相と、自己生命の実相とを正観す
ることが必要なのです。

上沢——「存在の実相と自己生命の実相とを正観する」

と申しますと？

谷口——存在には実相と仮相とがあるのです。仮相というのは現象のことです。現象というのは存在するよう^うに見えても本当に存在するのではないから、時々刻々瞬々^{ときときしゅんしゅん}移り変わっているのです。その移り変わるものを見つめていても捉えどころがないから、移り変わる現象を観ることを止めて望遠鏡で視力を集めて天を覗くように、心の視力を集めて実相を正観するようにするのは、これが神観でありまして、神観によつてわれらが心の方向を一転して存在の実相を正観しますと、あらゆる存在の奥の奥に横たわる円満具足の本質を悟ることができるのです。

上沢——ここにおっしゃる「あらゆる存在」とは、「あらゆる人、物、事」と解してよろしいでしょうか。

谷口——そうです。あらゆる人、物、事にも仮相と実相とがある、それで常に人に対し事に

に対し物に対し、仮相の不完全な姿を見ないようにし、円満具足の本質を見るようにするのがいいのです。

上沢——「円満具足の本質」とは、「神性」というような意味でしょうか。

谷口——そうです。神性といっても仏性といってもよろしい。一切衆生^{しゆじゆうぶつしやう}性ありと釈迦は言われましたが、生けるものだけではなく、いっさいの物事の奥にも実相があり円満具足の本質があるのです。この実相は五官や六感で知ることとはできないから実相覚で直覚するほかはないのです。

上沢——「実相覚で直感する」と言われる、その意味をくわしくお教え下さいませんかでしょうか。

谷口——実相のみが実相を知る、五官は感覚的事物のみを知る、これは類の波長が類の波長を感知するのでありまして、これには感覚的事物を追い廻していたら、実相の波長と、感覚的事物の波長とが混信して、不完全なラジオ機械が二重放送を分解しえないように実相を分離して感知することができなくなりますから、しばらく五官を蕩尽^{とうじん}して実相に自分の全存在を委ねるのです。すると「自分の実相」が直接「存在の実相」に触れ生命の実相に触れ、充たされ、またそれにとり囲まれていることを直接体験として悟得^{ごとく}するのです。これが本当の悟りであります。

上沢——先生が「存在の実相」とか「生命の実相」とかおっしゃいますのは言葉のアヤで同じことを別の言葉でおっしゃるのでございますか。それとも全然別の意味のことでございますか。

谷口——「存在の実相」というのは「モノソノモノの本当のすがた」というような意味であります。万物の実相と言ってもよいでしょう。われわれの五官で見る世界は「モノソノモノのホントノすがた」ではないことはすでに説明したとおりであつて、いろいろ不愉快な事物や事件などが現象界に起こっているのは、本当にそんな事物や事件が起こっているのではない、われわれの念で賦彩^{いふさい}して、不快でない幸福な事物事件を、そういう不快な出来事のように見せているのです。たと

えば「生活難」というようなことでも、「実相の人間」には生活難はないのですが、実際ないところの生活難を現象の上では「念の力」で仮創造しているのですが、それは現象世界のことであって、実相界にはそんな生活難はないのです。それでわれわれは「存在の実相」を見、すなわち「モノソノモノのホントのスガタ」を見るようにして、そこから自然法爾^{じねんほうに}に動き出せば、生活難というようなものも消えてしまうのです。すなわちわれらは、存在の実相の完全さを如実に現象界にあらわすことになり、自己が「神」なる人間本来の実相をそのまま現象の世界にも完全にあらわすこととなるのです。それでは「存在の実相」とは同一意味であるかと申しますと、存在するものはすべて「生命」であるという意味から申しますと、「存在の実相」という言葉も「生命の実相」という言葉も結局同一意味になるのでありますが、「存在の実相」という語はおおむね人間を離れての事物事件環境周囲などの実相という意味に用い、「生命の実相」という言葉は人間の本質——本来の人間の実相——ひいては「大生命すなわちわが生命なり」の自覚に立ちますと、「生命の実相」とは天地に満つる大生命の実相というような意味に用います。それで、人間がわが周囲の存在物の実相の完全な相^{すがた}を常に観るようにしますと、周囲が自分の念で光明化されてきますから、わが周囲には不完全な相^{すがた}や、欠乏の状態が現実に見られなくなってくるのです。要するに神の創造り給える「実相世界」には不完全や不幸はな

いのですからその人の周囲に不完全な状態、欠乏の状態等があるのは、その人の「念」が賦彩^{いろすけ}して、「實在の完全なる実相」を歪めて現象化したのですから、われわれが「念」を浄めて実相のみを見るようにすると環境は幸福となり、肉体の方から言っても、われらが常に「實在の完全なる実相」を意識するとき全細胞に滲透^{しんとう}している念は健全となり絶対健康の観念はついにわれらの全細胞全組織を改造するに到るのです。

上沢——ここに言われる「實在の完全なる実相」とは「神の完全なる実相」と解してよろしいかあるいは「實在の世界に在る、自己生命の完全なる相^{すがた}」と解する方が適正でありますか。

谷口——「實在の完全なる実相」とわたしは申しましたるその「實在」という意味は「本当にアルもの」と概括^{がいかつ}して考えてよろしい。「神のみが實在である」という立場からゆきますと、「實在の完全なる実相」とは「神の完全なる実相」ということにもなります。人間自身にとって言えば、「實在の完全なる実相」とは、「実相人間の完全なる実相」のことになります。この実相の人間すなわち人間本来の面目というものは常に健全を離れたことがないのであります。今、現に肉体が病氣していても、実相の人間は病氣ではないのです。

上沢——その病氣していても病氣でない「実相の人間」とは、「靈としての人間」あるいは、「生命としての人間」と解してよろしいでしょうか。

谷口——「靈としての人間」といっても、混同しやすい

言葉になります。「霊」という語は「普遍霊」という意味にも、「個別霊」という意味にも用います。「個別霊」といっても「実相の個性生命」と「仮相の個性生命」とを分けねばなりません。「実相の個性生命」は「神の子」そのもの、「仏子」そのものでありますが、「仮相の個性生命」とはいわゆる「迷っている霊」「亡者の靈魂」ということになります。だから、たんに「霊としての人間」というだけでは、「亡者の靈魂」やら「実相の個性生命」やらハッキリしないことになります。「実相の人間」というのは「実相の個性生命」という意味でありまして、神に創造^{つく}られたそのままの本物の完全な個性生命のことになります。そしてわれわれの「念」が正念であって、神に創造^{つく}られたそのままの人間の実相を完全にうつし出すような状態になっているならば、人間の生命は実相の世界から真^ま直に直射して来て、本来の自由自在な人間本性が完全に現象世界に投影せられ、現在世界に完全な自由人ができ上がるのであります。現象世界と申すものは「生長の家」の思想によりますと、「念」によって「実相世界」が投影せられた複製の世界ともいうべきものでありまして、この複製の世界が「現物の世界」（すなわち実相の世界）に完全に似てくると、この複製の世界（現象世界）が実相世界そのままに完全になるのであります。この現象世界という複製の世界を現像するためのレンズがわれわれの「念」であって、念のレンズすなわちわれわれが念々「存在の実相」を自覚し「神」なる自己生命の実相

を描いて、活きるとき、われらの念は曇りなく完全な複製用レンズとなるわけです。したがって自己の現実人間は完全に神なる人間本来の実相をうつし出すことになるのです。ここに環境も幸福、肉体も健康な「肉体人間」（実相人間の完全な複製）ができ上がることになるのであります。

九、靈山靈地の靈驗について

谷口——靈地靈山等にはそこを中心にして衆生済度に当たっている靈界の諸靈たちの一群が棲んでいるものであります。あなたの言われるような心靈現象はこれらの諸靈たちが、済度の方便として行なうのであります。こういう現象は物理的、心靈現象（Psychic phenomena）と申しまして、実験室でも時として出現しうる現象であります。これは宇宙普遍神の神罰というようなものではありません。個別的人格を有するある靈魂の作用のあらわれにすぎません。宗教的欲求から靈地を巡礼するという習慣は古来からあり、また現在もありますが、これは本当は正しい宗教的要求ではありません。奇跡を喜び、靈驗を歎ぶのは本當の宗教的要求ではないのであります。奇跡といい靈驗というのは現象界の利益でありますから、そういう現象界の利益を求めるのは、一つには怪異^{かいい}に対する好奇心であり、一つには異常能力に対する人間の憧憬^{しやうけい}で

あり、また一つには人間以上に異常能力ある何物かに頼って物質的利益を得んとする心であります。そのようなものを求める心は本当の宗教的信仰とは言えないのでありまして、あたりまえの生活の中に神が顕われているのがありがたいというようになるのが本当の宗教的信仰であります。四国地方は古来から各種の「霊」の巢窟そうくつとせられていたのでありまして、弘法大師の巡じゆん錫しやく以来、物理的心霊現象のさかんなる土地であります。弘法大師のあらわされたかは存じませんが、西洋の物理的心霊現象の霊媒には嚴重に両手両足を緊縛きんばくされたまま、一番下のシャツだけを裏返しに着てみたり、上衣は着たまままでシャツだけを脱いでみたり、手足を緊縛せる線金はりがね縄を、縛しばった原形のままで縄抜けしたり、不思議な現象を演ずるこの異常な物理的心霊現象を起こしている霊魂は、おおむね物理的現象を起こすに相應ふさわしいような物質的波動に近い体を備えた霊魂であります。高級霊はだんだん物質的波動を超えたいわば超短波以上の波動の体をそなえていますから、直接に物質を動かしてみたりするものではありません。ただこれらの現象が存在をゆるされるのは肉体滅後の靈魂存続を知る契機をあたえるからで、いったんそれを知った以上は、あまりそんな現象に深入りして、予言などをきいて信じてはなりません。そんな霊媒にかかってきて「最後の審判のときに生長の家の信者はたすかる」などという神託みたいなことを喋る霊があったら、それだけで

もその霊のインチキ性を暴露しているのです。人間の運命はその人の心の具象化でありますから、たんに生長の家の信徒名簿にあるから救われるなどというものではありません。イエスも「主よ、主よと言うもの必ずしも神の国に入るにあらず、父のみ心を行ずる者のみ神の国に入る」と言っています。そんな霊媒的修驗者の中には、この宗教を信じておれば最後の審判にもたすかるが、この宗教をやめたら最後の審判に焼きほろぼされるなどと言って脅して信者を恐怖心で釣ってゆこうとするのがありますが、宗教というものは金剛不壊ふえの法身ほっしんを自覚せしめ恐怖心をなくするためのものであつて、恐怖心をそそるだけでも、かかる宗教は邪教だと言わねばなりません。『般若心経』には「顛倒てんどう夢想を遠離おんりすれば恐怖なし」と示されています。恐怖にさそうのは迷いに誘うのであります。最後の審判に「焼き滅ぼされる霊」という話についてのわたしの意見は「霊」という用語の内容によっても異なるのですが、神から生まれた霊とは、「実相の生命」であつて、今も常に今後も真清水のごとく浄らかで少しも濁りません。したがって焼き滅ぼされることもありません。「生長の家」に言わせれば「実相の生命」は現に今も永遠にも濁っていないのであるから、なぜ濁るかの問が成立しないのであります。ところで「われわれの実相生命」——（これのみが本当の自分自身であります）——これは濁らず、したがってもとより焼きほろぼされることがないとすれば、焼き滅ぼされるというのは

「いかなる靈」のことでしょうか。それはわれわれの
実相生命ではない。それはわれわれの「業」なのです。
仏教では「靈」という言葉を使わず、生まれかわるの
も「靈が生まれ代わる」と言わず、「業が輪廻する」と
言うのです。業に善業と悪業とあり、悪業とは実相と
波長の合わせぬ念波の集積であり、善業とは実相と波長
の合う念波の集積であります。この場合、「靈」という
言葉と「業」という言葉とは同じなのです。悪靈が焼
き滅ぼされるとは、悪業が完全に壊滅することなので
す。これは当然のことなのです。悪業は「実相の念」
にあらざるがゆえに壊滅するのは当然なのです。悪業
が輪廻しなくなる、すなわち「怨靈が生まれ代わらな
くなる」のです。それがなぜ恐ろしいのでしょうか。
われわれはただ「実相生命」の実在のみを知り、悪業
の結局自壊することを常に説き、悪業の自壊によって、
かえって本当の自分が完全に開顕することを説いてい
るのです。「焼きほろぼされる靈」と申しますが、それ
は「靈」ということばを「生命」と誤解したがために、
自分自身が焼き滅ぼされるような感を抱いて恐怖する
のでありますが、「靈」という言葉をば「輪廻する業」
という正しい意味にとるときは、焼き滅ぼされるのは
自分自身ではなく、悪業が焼き滅ぼされ、自分自身の
実相はかえっていつそう完全に開顕するのですからど
こまでいっても「生長の家」は恐怖の宗教にはなりま
せん。悪業が焼きほろぼされることを恐れる人は自分
の実相生命を知らず、自分とは「業」だと思っている

のです。

松山——有名な靈媒でも詐術さじゆつを行なうことがありますか。
谷口——それは有名な人格者でも詐欺さぎを行なうことがあ
るかという問題と同じです。靈媒が心境が落ちてきて
従前どおりの靈的現象ができなくなってきたとき、そ
れを隠して人前をつくらうために手品式な方法をもつ
て靈的現象だと見せかけることがあります。しかしそ
の人が今詐欺を行なったからとて、過去も常に詐欺を
していたと断定するのは間違いであります。

生命の實相 谷口雅春 日本教分社